

陸 稻 の 畑 地 灌 漑 用 品 種 に つ い て

中渡瀬清香*・河野 義彦*・宮下 茂樹*

NAKAWATABE, K., KAWANO, Y. & MIYASHITA, S. On the Varieties
of Upland Rice Planting in the Irrigating Upland Field

鹿児島県は水田に恵まれず約 15,000 町歩内外の陸稲が栽培せられ、これが生産力を高め特に収量の安定を期することは極めて重要なことである。このため陸稲を中心として畑地灌漑確立に関する試験研究を行つて来たが、この資料は昭和 28 年度における灌漑用品種選抜に関する試験成績の概要である。

I. 試験方法の概要 早生系梗 5 品種、糯 2 品種、晩生系梗 4 品種、糯 3 品種、計 14 品種を供試、5 月 18 日 苗床播種、7 月 3 日 移植して 1 区 4 坪、2 区制で試験した。7 月下旬より 9 月上旬にかけて 1 回 40m m 程度を 5 日毎に灌水し、計 11 回 440m m となつた、経過は順調であつた。

II. 試験結果の概要 1. 灌水により出穂期が促進したものが 4 品種で鹿児島葉冠 1 号の 2 日が最大、他は殆ど 1 日である。変化なかつたもの 2 品種、遅延したものが 8 品種で浦三の 3 日、トサハタモチの 2 日、他は 1 日であつた。品種の特性による傾向は明らかでないが、大体早生系が遅延し晩生系に促進が見られるようである。2. 成熟期が促進したものは 9 品種で鹿児島葉冠 1 号の 10 日が最大、変化なかつたもの 2 品種、遅延したものは 3 品種で西海 22 号の 6 日が最大である。3. 結実日数は短縮されたもの 11 品種で、農林 17 号の 15 日が最大、変化のなかつたもの 2 品種、延長したものは西海 22 号の 1 品種で、大体において短縮される傾向にある。4. 灌水により稈長は問題なく増加し、その最も顕著なものは鹿児島葉冠 1 号の 15.4 cm、最も低いもので農林 9 号の 3 cm で大体に晩生系に強い影響が見られるようである。5. 穂長

も同様増加し農林 11 号の 11cm が最大、農林 7 号の 0.1cm が最少で晩生品種及び穂重型品種に強い傾向がある。着粒数調査を欠いたが穂長の増加に伴い自ら増加するものと判断される。6. 1 株当穂数は大部分が増加し農林 6 号の 5.1 本が最大で、農林 7 号の 1 品種のみ 1.2 本減少した。大体穂数型品種に多くなる傾向が強い。7. 精糲歩合は農林 5 号が変化なかつた外は顕著に増加し、特に糯品種に強く殆ど倍加している。ミナミハタモチの 37% 増が最大となつた。8. 玄米千粒重はトサハタモチが僅かに減少し、浦三が変化なかつた外は殆ど増加し、灌水が稔実に効果的に作用していることが認められる。9. 玄米 1 升重はハタムラサキ、トサハタモチ、西海 22 号の 3 品種が減少し、大部分のものは増加するがその差は顕著でない。10. 白穂の出現はミナミハタモチの 21% を最大として、無灌水区の全品種に認められた。11. 各収量構成要素の総合である玄米収量は農林 5 号のみが減収した以外は顕著に増収し、特にミナミハタモチ、農林 6 号と同程度の熟期のものに強い。

III. 考察 以上は各収量構成要素に現われた品種間の灌漑効果と玄米収量との関係の概要であるが、試験が僅かに 1 年でありまた品種の特性就中感光性、感温性等が明確でない関係から更に検討する必要がある。大体において穂重型品種は穂長の増加による子実生産効率の向上、穂数型品種では穂数の確保による生育量全体の増加が認められ、共通的に精糲歩合、千粒重の著しい増大が見られる。更に灌水効果は耐旱性品種に低く、耐旱性の弱い品種に高い傾向は当然のことと言われよう。

*鹿児島県農業試験場鹿屋分場